MOMOTOSE DAYORI

ももとせ便り

令和5年癸卯
春号

JINGUKAN

No.58

特集 神話伝承シリーズ⑩

武道・建国の二神を巡る

香取・鹿嶋

亀甲文様

「鶴は千年、亀は万年」といわれるように、長寿吉兆の象徴である亀。その甲羅に由来する六角形の文様で、縁起が良く、古くから多くの人に愛されています。六角形をつなぎ合わせたり（亀甲つなぎ）、花びらをあしらったり（亀甲花菱）、三つ組み合わせたり（毘沙門亀甲）、二重にしたり（子持ち亀甲）、派生しながら着物や調度品、家紋などさまざまな品に幅広く使われてきました。

ももとせ便り No.58 発行／神宮館 東京都台東区東上野1−1−4 TEL 03-3831-1638 https://jingukan.co.jp 発行人／木村通子

四季の移ろいを感じ楽しむ

七十二候

1年を24等分した二十四節気（立春、春分など）を、それぞれ3つの「候」に区切った節目を七十二候といいます。移ろう季節を愛でる日本人の豊かな感性を象徴しています。

啓蟄 末候

菜虫化蝶

なむしちょうとなる

3月16日〜3月20日頃

天地の気が生命を目覚めさせる
夢見鳥が舞い踊り華やぐ季節

菜虫とは青虫、主に紋白蝶の幼虫を指します。土の中で眠っていた虫や蛇が目覚めるこの季節には、さなぎが羽化し蝶へと変わる幻想的な光景が見られます。蝶は別名「夢見鳥（ゆめみどり）」。中国戦国時代の思想家である荘子の代表作『胡蝶の夢』の説話に由来します。一方ギリシャ神話において蝶は魂の象徴とされています。はるか昔、人々は青虫がさなぎになり羽化する理由を知りませんでした。季節に伴う草木の変化も、春に虫や蛙が動き出すのも、あらゆる自然現象は目に見えないエネルギー「天地の気」によって起こると考えられていたのです。

開運ポイント

夢見鳥の別名を持つ蝶。願いごとを書いた紙を枕の下に入れて眠り、羽根のついた天使や妖精が夢に登場すれば、幸運が舞い込む予感…。蝶のキーホルダーやハンカチで運気を呼び込みましょう。

神宮館 REPORT

「鳥越神社&匂い袋作成体験ツアー」

2022年9月28日（水）開催

お香を使った開運法を伝授

今回の開運ツアーは参加者の皆様と一緒に開運を引き寄せるお手伝いをしたいという思いから、縁起物である匂い袋の作成体験と由緒ある鳥越神社の散策ツアーを行ってきました。

鳥越神社は浅草に近い東京都台東区にあり、651年に創立された歴史のある神社です。本殿を参拝後、宮司様より神社の由来や歴史、6月に行われた鳥越祭の様子、千貫神輿のことなど貴重なお話を伺いました。

その後は、薫物屋香楽みやびに場所を移して、古くから邪気を祓うといわれている匂い袋の作成をしました。アドバイスされたそれぞれの九星に合った天然由来の香原料を参加者の方がブレンドしたオリジナルの匂い袋が完成しました。

匂い袋を身に着けることで悪い気を祓い、開運が訪れることを願います。

▲歴史ある鳥越神社の本殿

▲優しい香りに心身ともに癒される

《次回告知》

3月と5月に写経会を予定しています。お楽しみに！

ももとせクイズ

Q 建御雷神と経津主神に国を譲った神の名は？

応募方法

郵便はがき 「お名前」「郵便番号」「住所」「電話番号」「生年月日」「クイズの答え」「ご意見・ご感想」を必ず明記ください。
〒110-0015 東京都台東区東上野1-1-4
株式会社神宮館 「ももとせクイズ」係

インターネット https://jingukan.co.jp/momotose-present/
右のQRコードを読み込み、応募フォームにアクセスしてください。

応募締切 2023年3月末日

※当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

今回のプレゼント

あかしや新毛筆 古都
3名様

コシが強く書きやすい筆ペン。写経にもおすすめ。デザインは写真と異なる場合があります。

※前回の答え「14体」

特集 神話伝承シリーズ⑩

武道・建国の二神を巡る

香取・鹿嶋

Katori Kashima

鹿島神宮の楼門

香取神宮の楼門

鹿に導かれ訪れた香取神宮

今回は武神として名高い二神を訪ねる旅。最初に訪れたのが千葉県香取市。東京駅から首都高経由で1時間ほど車を走らせ、佐原香取インターチェンジを降りるとすぐに香取神宮が見えてくる。経津主神を御祭神として祀っている神社だ。駐車場に停めてすぐ目に入るのが、厄落としだんごのお店などが並ぶ参道。以前はもっと活気があったのではないかと思うが、平日だったこともあり少し閑散としていた。そこを抜けると社号標と朱色の鳥居が見えてくる。緑に包まれた参道で森林浴を楽しみながら歩いていると、心が洗われるようだ。経津主神と建御雷神が手紙をやり取りした際に鹿を使いにしたとの言い伝えから、鹿は神様の使いとして大切にされており、立ち並ぶ石燈籠は鹿がモチーフに。やがて朱色の総門と江戸中期となる1700（元禄13）年に徳川幕府によって造営された楼門が見えてくる。

▲参道入口

◀燈籠が立ち並ぶ参道

境内の茶屋でのお団子

拝殿で参拝を済ませると、本殿の裏に「見晴らしのよい休憩所寒香亭」の看板が。今まで多くの神社を巡ってきたが、本殿裏手に茶屋があるのは初めてのように思う。参道で食べるのを我慢したので、ここで香取だんごをいただくことに。甘すぎない素朴な味わいの餡とよもぎのお団子をいただいたのだが、甘味以外にもラーメン、焼きそば、おでんなどメニューが豊富なお店だった。お店の少し奥にある鹿園では鹿が神様の使いとして大切に育てられているようだ。最後に訪れたのが要石。地震を鎮めるとされる霊石で、鹿島神宮にもある要石が凹形に対して、こちらは凸形をしている。本殿からは少し離れた場所にあるのだが、忘れずに訪れてほしい。

▲見晴らしのよい休憩所「寒香亭」

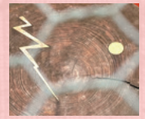
▼凸形の要石

鹿島神宮で「鹿島立ち」

続いて訪れたのが香取神宮から車で25分ほどの鹿島神宮。途中、全長950メートルを誇る神宮橋を渡ると、そこからが茨城県鹿嶋市となる。1995年に鹿島町と大野村が合併する際、佐賀県にある鹿島市と間違えないように「嶋」の字を使うことになったそうだ。

御祭神である建御雷神も武神として有名だが、鹿島神宮は「すべての始まりの地」とも呼ばれ、防人や武士が旅立つ前に道中の無事を鹿島神宮で祈願することから、旅立ちや人生の門出を指す言葉として「鹿島立ち」という言葉ができるほど。

駐車場からすぐの大鳥居を抜けると、1634（寛永11）年に水戸徳川初代藩主の頼房卿により奉納された朱色の楼門が見えてくる。香取神宮の楼門と造営された時代が近く、どちらも徳川幕府が関係しているためか、とてもよく似ている。その楼門をくぐって裏側に回ると、左右に切り株が配置されており、右は太陽と雷、左は月と雷が描かれている。建御雷神は雷の神様でもあるためだ。そして拝殿と本殿があるのだが、参道の右手という珍しい配置になっている。



▲楼門裏手にある太陽と雷（右）、月と雷（左）のモチーフ

▲鹿島神宮の拝殿

みたらし団子で一休み

奥参道は樹叢（じゅそう）と呼ばれ、70ヘクタールの敷地に約千種の植物が繁茂している。少し歩くとここにも鹿園が。香取神宮と同じく、鹿島神宮でも鹿は神の使いとして大切にされている。ここでは鹿のエサを販売していた。奥宮から右に行くと香取神宮と対になる凹形の要石。奥宮を左手に下りると御手洗池がある。古くから禊（みそぎ）の場として使われてきたらしく、現在も年始に多くの人が「大寒禊」を行っているそうだ。すぐ横には、池の湧き水を使った料理や飲み物が楽しめる「湧水茶屋一休」。炭火で焼く光景に誘われて、みたらし団子を一本いただき、鹿島神宮を後にした。

▲凹形の要石

▼御手洗池

▲炭火で焼かれる団子

今回の旅で購入したお土産

◎神鹿みくじ

神の使いでもある鹿の焼物付きおみくじで、鹿島神宮で手に入る。

◎竹皮きな粉草だんご

よもぎを練り込んだ生地で小倉餡を包んだ、一口サイズの草だんご。

国譲り（くにゆず）とは

度重なる葦原中国（あしはらのなかつくに）の平定の失敗を受け、高天原の神々は経津主神（ふつぬしのかみ）と建御雷神（たけみかづちのかみ）を大国主神（おおくにぬしのかみ）の元へ遣わすことに。大国主神の子どもたちとの一悶着はあったが武力で治め、国譲りを成就したことから、両神は武神として祀られている。

香取・鹿嶋　おすすめスポット

息栖（いきす）神社

香取神宮、鹿島神宮と合わせて「東国三社」と呼ばれる息栖神社。鹿島神宮の摂社で「南の一之鳥居」でもある。

北総の小江戸「水郷佐原」

利根川水運の中継基地として栄えた水郷佐原には、川沿いを中心に江戸情緒あふれる町並みが残る。ここでぜひ体験してほしいのが、水上から町並みを眺めながらゆったり過ごせる約30分の「舟めぐり」。日本最初の全国実測地図を作った伊能忠敬を紹介する「伊能忠敬記念館」もおすすめ。

今回訪れた香取と鹿嶋、どちらか一方だけでも満足感は高いが、どちらも訪れて共通点や違いを感じながら回ると楽しみも増すので、おすすめしたい。

DATA

- 香取神宮
  千葉県香取市香取1697-1
- 鹿島神宮
  茨城県鹿嶋市宮中2306-1

《千葉県香取市》
北総台地の北部に位置する香取市は多彩な農業が行われている関東の重要な食料供給地域。江戸時代に利根川水運の中継地として栄えた佐原地区は「北総の小江戸」と呼ばれている。

《茨城県鹿嶋市》
北浦と太平洋に挟まれた水と緑の自然が豊かな鹿嶋市。近年では、Jリーグの鹿島アントラーズの本拠地として知られており、宮本武蔵との「なべぶた試合」の話で知られる塚原卜伝を生んだ地としても有名。